

第 1 問 次の文章を読んで、後の問い(問 1 ～ 6)に答えよ。(配点 50)

科学は現在、近代文明社会を根底から支え動かす巨大な力となっている。人間の在り方をも大きく包み込んでいる。我々は気がついた時、既に様々な分野の科学の知の体系ができ上がっていて嫌でもそれらを学ばねばならないようになっていく。そのため科学は、越えて行かなければならない山脈のように我々の前に立ちはだかっている。人間から独立したもののようには思われがちである。科学だからダイ(ア)ジョウブだとか科学は悪いとか人ごとのようにいわれるのがそれである。しかし本当は、人間を離れて科学があるのではない。科学とは人間の営みであり人間の一つの在り方である。ただし、科学は人間の実存ではない。人間の知性の世界であって存在の世界ではない。人間がものごとを見るある一定の見方を組織したものが科学である。ただ、その見るといふ客観化の働きの最も徹底したものであるため、科学の知という表現が蛇足になるほど知そのものほとんど同義語になっている。

実存としての人間から独立し得るほど知としての徹底さを持つ科学といえど、人間の知であるからには人間がものごとを知る意識の働きのなかに基礎を持っている。そこで、意識全体の(イ)カイソウのなかで科学がどのような位置にあるかを確認することが必要であろう。

私(主観)が物(客観)を見るといふのは、結果として現れてきた現象である。私という意識は意識されるもの(客観)なしにはありえず、客観も意識するものなしにはない。そこで、人間がものごとを知るといふ主観と客観の関係の基礎には両者が一体となった状態があり、その原初の世界が分化することによって知るといふ意識の現象があると見なされなければならない。この意識の根源にある世界は直観の世界であり、古来、主客合一、物我一如といわれてきた。我々が我を忘れてものごと熱中している時や、美しい風景にうっとり見入っている時を考えるとすれば理解しやすい。しかしこの例に限らず、どのような場合にもそのような一体化した状態が意識の根源に存在している。A それ^Aが分化した時、人間の意識の世界が現れてくる。それは意識するものとされるもの、知るものと知られるものの世界である。これは、主客対立とか主客分裂とかいわれるが、私と私でないも

のの区別が明瞭めいりょうとなる世界である。

意識の根源の世界が分化することによって現れる意識の最初の形態が感覚かかく（知覚）である。感覚の特徴は、その働きの次元が現在にのみ限られるという点である。つまり感覚が捉とらえるものは、「現在のもの・その時のもの」である。眼まに映っているものは眼を閉じれば見えなくなるし激痛も過ぎ去ればうそのようである。しかしそれらの感覚経験は我々の心に痕跡こんせきを残す。それは記憶ともいえるが、単なる言葉の記憶よりも深い所で直感される印象・心に残された残像であり、心象・イメージと呼ぶことができる。

イメージは固定的なものでなく、普通は時と共に薄れていく。この感覚とイメージの世界に生きる点では人間も動物も同じである。ところが人間はイメージに名前を付けることによってそれを固定して保存する。これが言葉の世界である。イメージはそれぞれ異なっているが、類似したイメージに対してはその類似性に基づいて一つの共通の名前が与えられる。たとえば我々の前に高い山がある。じつと見ていると類似した感覚的イメージの流れがあり、次の日に来てウナガめても前日と類似した感覚的イメージが経験される。そこでその山に富士山という名前を付ける。動物と異なる人間の世界は、流動的世界を固定してその世界のものごとに名を与える言語の世界である。確かに動物にも言葉はある。言葉とは、それによって何かを指し示す記号である。しかし動物の場合、類似した感覚的イメージを身振りや鳴き声で固定して表現するその言語（記号）は、必ず現在のものを指し示すことに限られている。たとえば危険を表す鳥の鳴き声は現在そうであることを離れて意味を持たないし、ベルの音が餌えさを指示するという記号の習得をした犬にとつてベルの音は今餌が出るぞという意味であり、その音を涎よだれを出すことなしに聞くことはできない。このような犬とベルの音の関係に対応するのが、人間の場合食事という言葉である。これは、犬に対し餌を指示するのにベル以外のものでもよかつたのと同様に、別の言葉でもありえたのであるが、いったん食事という言葉に固定されると現実のすべての食事現象を表す記号となる。それは動物におけるような現在の現象だけに限らず、過去のこととも未来のこととも示す記号として使われる。だから、動物の言葉が現在において一対一の関係で直接にものごとを示す信号であるのに対し、人間の言葉は、あらゆる時の一定の類似した現象すべてを表す一般的記号であるため特に象徴と呼ばれる。B 言葉を話す人間は象徴を

操る動物である。

ところで、言葉は類似した感覚的イメージの共通な部分を抽出した一般的なものに対し、それが表す現実の個々の現象はすべて微妙に異なっている。しかるに人間の経験はすべて現実の現象に基づくものである。感覚的イメージはすべてそこから与えられる。そしてそのイメージに照らして言葉を使っている。言葉はその人にとって過去のすべての感覚的イメージ経験を集約するものとなっている。だから同じ言葉を使っている、人によってその言葉に反映しているイメージは異なるので意味のズレがあるはずである。人間は言葉によって表面的なコミュニケーションはできるが、お互いに深く分かり合うには、長くつき合って同じ生活経験を共有することが必要になる。

言葉には、個々人によって異なつた過去の経験に基づく異なつたイメージが反映している。C そのような日常言語は、人によつてニュアンスが異なり多義的である。そこでその曖昧さを解消するため、意味が明確に定義された言葉が現れてくる。それが概念、専門語であり、学問が成立するのはこのレベルにおいてである。そしてこの言語の客観性をさらに徹底させたものが、数学という自然科学の言語である。これは概念のもつ質的本性も量的単位に還元する最も抽象度の高い記号・数式である。

数学という言語を用いる科学において、人間の意識の働きは知られるもの(対象)から最も明確に分離した在り方をとっている。そこでは対象とつながる感覚性やイメージ性は完全に排除されている。それはものごとの客観化や対象化が極度におし進められたものである。感覚といえど何らかの対象を知るのであるから対象化の萌芽はあるが、概念においてははじめて、ものごとのつながりを離れた客観化・対象化が完成する。しかしなお質的把握という点で問題を残して、その対象化をより徹底させたのが近代科学の見方である。これは、物と心との一体的関係から最も遠ざかつている。そのため知のなかの最も確実な知とされているが、同時に、ものごととの生きたつながりを失つた抽象的な世界である。そこで働く知性の能力は、ものごとを分析したり一般化したる思考能力で、悟性とか理性とかいわれている。

我々が世界とのつながりを持つのは感覚やイメージにおいてである。これらは日常的経験の基礎になっている。感覚の能力は感性であるが、イメージの能力は想像力である。この想像力は、感覚によつて与えられたイメージを造り変えたり組み(エ)カえ

たりして人間の創造活動のゲン(オ)センとなる。精神文化は、精神の深層において体験されたイメージの表白である。芸術は美のイメージ、道徳は善のイメージ、宗教は聖のイメージ、哲学は真のイメージというようにイメージの持つ象徴性が想像力によつて様々な形を与えられる。これらは感覚的経験と同様、世界とつながった実存の世界である。

これに対し科学は、我々の意識が物との直接的なつながりを完全に断ち切り、**D**対象化を徹底した知の世界である。だから感覚の主観性やイメージの象徴性は完全に排除されている。

(山下勲『世界と人間』による)

問 1 傍線部(ア)～(オ)の漢字と同じ漢字を含むものを、次の各群の①～⑤のうちから、それぞれ一つずつ選べ。解答番号は

1
5

(ア) ダイジヨウブ

1

- ① 胃腸薬をジヨウビする
- ② ガンジヨウな家を建てる
- ③ ジヨウダンで人を笑わせる
- ④ 所有権を他人にジヨウトする
- ⑤ 嚴重にセジヨウする

(イ) カイソウ

2

- ① 事件にカイニユウする
- ② 疑問がヒヨウカイする
- ③ ケイカイなフットワーク
- ④ チヨウカイ処分が下る
- ⑤ らせん状のカイダン

(ウ) ナガめ

3

- ① セイチヨウな秋の空
- ② 年度予算がボウチヨウする
- ③ 眼下のチヨウボウを楽しむ
- ④ チヨウリ場の衛生管理
- ⑤ 会場いっぱいのチヨウシユウ

(エ) カえ

4

- ① 仕事のタイマンをしかられる
- ② 吹雪の中のタイカン訓練
- ③ フタイテンの決意をする
- ④ 破損した商品のダイタイ物
- ⑤ 梅雨前線がテイタイする

(オ) ゲンセン

5

- ① 知識のイズミである書物
- ② 悪事に手をソめる
- ③ アサセで遊ぶ
- ④ 海にモグ
- ⑤ 候補者としてススめる

問 2 傍線部 A「それが分化した」とは、なにがどうなることか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから

一つ選べ。解答番号は

6。

- ① 人間の主観と客観の混合した直観の世界が、再び主観と客観に区分されること。
- ② 我々が熱中のあまり我を忘れた状態から目覚め、冷静な自分を取り戻すこと。
- ③ 私の意識が、意識するものと意識されるものに分裂し、知る働きが現れてくること。
- ④ 人間の意識の根源にある世界が、見る私と見られる対象の世界に分離すること。
- ⑤ 私と私でないものの世界が、明瞭に分かれて意識の世界に顕在化すること。

問3 傍線部B「言葉を話す人間は象徴を操る動物である」とあるが、その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうち

から一つ選べ。解答番号は 7。

- ① 人間以外の動物が目の前の現象を身振りや鳴き声で表現する信号しか持たないのに対して、人間は複数の異なるイメージを一つのイメージに集約することで、ものに名前を与えることができる。
- ② 人間以外の動物が一对一の関係でものごとを指し示すのに対して、人間は複数の感覚的イメージから類似性を抽出することで、各自のイメージ経験の微妙なズレを解消することができる。
- ③ 人間も人間以外の動物も感覚的イメージを表現できる点では同じだが、人間は類似した現象に名前を与えることで、時間を超えてそれらの現象を同じ言葉で指し示すことができる。
- ④ 人間も人間以外の動物も感覚とイメージの世界を生きる点では同じだが、人間は時とともに変化するイメージに名前をつけて固定することで、一般化された記号を獲得することができる。
- ⑤ 人間は人間以外の動物と異なって、経験によって獲得した曖昧なイメージに名前をつけて抽象的なイメージに統合することで、個人の経験を超えた共通の世界を出現させることができる。

問 4 傍線部 C「そのような日常言語は、人によってニュアンスが異なり多義的である」とあるが、「そのような日常言語」の具体

例として最も適当なものを、次の ① ～ ⑤ のうちから一つ選べ。解答番号は 8。

- ① 山に登ると水は貴重だ。ペットボトルの水が半分残っているのを見て、ある人は「まだ半分ある。」と思うし、別の人は「あと半分しかない。」と思う。水の分量は同じであっても、その受けとめ方は人それぞれだ。
- ② 公園で、子どもが「いっこ、にこ……。」と小石を数えている。そばにいたその子の弟が不思議そうにそれを見ている。数の数え方を知らない弟にとって、兄の言葉はおまじないのようなものにしかな聞こえないのだ。
- ③ 西洋の名画が特別に公開された。展覧会場をあとにした人たちは口をそろえて「やっぱり傑作だ。」と感激していた。多くの人々に深い感銘を与える美は、時代や文化の違いを超えて普遍的なものなのだ。
- ④ 友人とデパートの入り口で待ち合わせた。約束の時間に現れないので携帯電話に連絡すると、別の入り口にいた。「デパートの入り口で……。」「という同じ言葉であっても、それぞれが思い浮かべた場所は違っていたのである。
- ⑤ 最近、家を新築したおじが、「駅から近いよ、歩いておいで。」といって、手書きの地図をくれた。「近い」というので地図をたよりに歩いたところ、かなり歩かされた。「近い」といっても人によってはだいぶ差がある。

問 5 傍線部 D「対象化を徹底した知の世界」とあるが、その特質を説明したものととして最も適当なものを、次の ① ～ ⑤ のう

ちから一つ選べ。解答番号は 9。

- ① 対象化とは、意識するものとされるもの、知るものと知られるものを明確に分離することである。数学という言語は、その分離を理性によつてより明確にし、物とのつながりを断ち切り、物から完全に離れることを可能とする。
- ② 概念は、たとえ明確に定義されていても曖昧な部分を残すが、対象を量に還元する数字や数式は、意識と物とを切り離すことで曖昧さを排除する。数字や数式を用いる科学の世界では、物を最も客観的にとらえることが可能である。
- ③ 日常言語が曖昧さから逃れられないことに比べ、数学は人間の経験の集積を量的単位に還元することで、その曖昧さを完全に除去している。そのため近代科学に代表されるような、より客観的な物の見方を可能にしている。
- ④ ものごとを知ること自体がすでに対象化の出発であるが、それを積極的におし進めるためには、感覚やイメージの持つ曖昧さを解消する必要がある。質的把握の面で問題を残すものの、抽象的な記号はその理想の言語である。
- ⑤ 感覚やイメージの働きは確かに客観性に欠けるところがある。しかし、人間は感覚やイメージをより洗練させ、より高い客観化を可能とする理性や悟性を持ち合わせており、それらは同時に近代科学の世界の基礎ともなっている。

問 6 本文の内容と合致するものを、次の①～⑥のうちから二つ選べ。ただし、解答の順序は問わない。解答番号は

10

11

- ① 人間の感覚やイメージは主観性や象徴性を超えるものではないが、我々の日常的経験の基礎をなしているものであり、芸術や道徳、宗教や哲学といった精神文化を生み出す根源的な力ともなるものである。
- ② 感覚やイメージを排除し、生きた世界とのつながりを断ち切ることで知のなかでも最も確実な知となった科学は、そのぶん抽象化をまぬがれることはできず、人間の営みからは独立したものとなる。
- ③ 科学は人間の営みにほかならないので意識の働きのなかに位置づけられるものではあるが、意識と対象とのつながりを切断することで個別な感覚やイメージの持つ曖昧さを解消し、徹底的に客観化をおし進める。
- ④ 日常言語が対象と意識が未分化な主客合一的、あるいは物我一如的な言語であるのに対して、数学を代表とする自然科学の言語は、物と心の一体関係からは最も遠ざかった客観化された言語である。
- ⑤ 人と人とのコミュニケーションでは、生活に根ざした感覚的イメージが反映されるため、言語のニュアンスに微妙なズレが生じるが、長くつき合い同じ生活経験をすることでその曖昧さを解消することが可能である。
- ⑥ 意識の根源においては私と私でないものは一体化しているが、科学の知は見るという働きを徹底化させることによって始めて原初的な世界を分化させ、主と客、私と私でないものを区別して対象化を完成させる。

第2問

次の文章は、野呂邦暢「白桃」の一節で、戦後の食糧難の時代を背景としている。ある日、少年とその兄は、かつて父の使用人であった酒場の主人のところへ使いに出された。これを読んで、後の問い(問1〜6)に答えよ。(配点 50)

秋であった。

医師は妹の肺炎にベニシリン(注1)がいるとつけた。金さえあれば解決することである。兄弟は包みをもたされて、それは九歳と十歳の子供にもてるくらいの量だったが、店へやって来た。

主人はいつもの上機嫌で、心得顔(ア)に二人をむかえ、包みをうけとって奥へ消えたまま出てこない。ついさつき、気むずかしい顔つきの男が呼ばれて奥へ去ったのも、包みにかかわりがあると思われる弟は不安だった。

客の出入りは多かった。

「どうしたんでしょうねえ」

わずかな暇をみて女主人が奥へ去り、しばらくしてもどると、二人のまえにおいてあった桃をとりあげて皮をむきはじめた。女主人はなにかいうのだからかと顔を見つめても少年たちには黙っている。

奥で、なにか(イ)のつびきならぬことがおこったのかもしれない、と弟は想像した。女主人の細い指が器用にナイフをあやつって、手の中で桃をあたかも一つの毬(ホ)のようになるところがしながら皮をむくの彼は見ていた。皮は細い紐(ヒ)になってテーブルの上におちた。

皮をむかれた桃は、小暗い電灯の照明をやわらかに反射して皿の上にひっそりとのつている。汁液が果肉の表面ににじみ出し、じわじわと微細な光の粒になって皿にしたたがった。弟はテーブルから目をそむけた。

しかし、壁を見ても客の姿を見ても、目にかぶのは輝くばかりの桃である。淡い蜜色(ミ)の冷たそうな果実は、目をとじてさえも鮮やかに彼の視界にひろがる。戦争以来、何年も見たことのない果実であった。

女主人は客のいるカウンターへ去った。

「帰ろうよ」

弟はささやいた。

「お金をもらったら帰る」

兄がおもおもしろく宣言した。弟の目には兄がおとなっぽく映った。自分ひとりが乳のみ児ごのように道理をわきまえない子供だと思われ、それが肚はらだたくもあつた。いったい兄は皿の桃をどう思っているのだろう。手をのばして触りたくもないのだろうか。大豆（注り）滓かとどうもろこしの雑炊を食べていて、どうして平然とおちつきはらつていられるのだろう。

弟はズボンのポケットに握りこぶしを入れ背をまるくしてうなだれた。兄はいう。

「おまえが小さいときは何でもあつたのだよ。チョコレートもカステラも。忘れたのかい、食べきれずにするほどだつた」

いよいよ弟は背をまるくした。兄が嘘うそをついているとは思わなかつたが、そんなことは一つもおぼえていなかった。たぶん事実だろうが、何でもあつた昔むかしを考えるのはつらかつた。今は何もないのだから。

そのとき大きな手が兄弟のまえのテーブルをたたいた。二人は顔をあげた。酒場の主人がどさりと風呂敷ふろしき包みを投げだしてせきばらいた。

「見な、わしはやすやすとごまかされるそこいらのちんぴらとは違ちがうんだよ。初めこの米を見たとき、なんとなく色つやが悪いと思つたな。明かりのせいかと思つて奥の電灯でしらべてみた。念のためこの人に立ち合つてもらつて篩ふるいにかけてみた」

「おれ、帰るからな」

立合人は兄弟を等分に見くらべてから店を出ていった。主人はふりむきもしなかつた。

「篩ふるいにかけてみたらおどろいたよ。屑米くずまいと糠ぬかがたつぷり混ぜてあるんだ。いいかね、おやじさんに頼んだのは鮎すしにつかう上等の米だよ。これがつかえるかい。あんまりみくびつてもらいたくないもんだ。そうとも、昔は社長のお世話になつたさ。だけどご恩返しはしたつもりだ。酒代だつてだいぶたまつているが、一度も催促なんかしやしない。B

要するにわたしのいいたいことは、社長ともあろう方がこんなけちなペテンをなさるとは残念なんだ。こう申しあげてくれ。鮎すしにつかえる上米ならいつでも

しかるべき値段で引き取らせてもらいます、とね」

「おっさんよう、いい加減にしねえか、相手は子供だろ」

客の一人がカウンタ―から声をかけた。

「おっさん、だれだつて今は何かしらやらないと生きてゆけないんだよ。ペテンの一つがどうしたんだい、ええ、大損したわけでもないんだろ、それにあんた^{うぶさ}噂ではメチ―ル^(注3)でしこたま^{もち}儲けたそうじゃねえか」

「うるさい、貴様にわしの気持ちかわかるもんか、うちの酒がまずかつたらさつきと出てゆけ」

いきりたつた主人のけんまくにおどろいて店じゅうの客が兄弟の方を見た。相手は子供だろ、といった男は口の中でなにかつぶやきながら主人から目をそむけた。弟は兄をふりあおいだ。兄は言葉もなくうなだれている。女主人がテーブルにひろげた米をつつみなおして主人に提案した。

「こちらのふつうの米だけでも引き取つてあげたら」

「おまえまでそんなことをいう、いや、この際は断固として……」

女主人は客の方へ去つた。

二人は包みを抱きかかえて店を出た。月が空を明るくしていた。白い皿のようなそれは兄弟が店にいる間にのぼつたらしい。

「ほら」

弟は兄のシャツを引いた。

「なんだよ」

とげとげしい返事に弟はあわてた。月の光が昼とはまったく異なる物の影を地上につくりだしているのに弟はおどろいたのだった。その異様な夜景に兄の注意をひこうところろみて、彼はそくさに黙りこんだ。今の兄が銀色の月に陶酔できるはずがない。

弟は身ぶるいした。空気はこのほか冷たかつた。空腹のあまり胃が痛かつた。手の包みが石でもかかえているように重たかつた。

「どうしよう」

うって変わったように弱々しい兄の口調にかえって弟はおどろいた。

「どうしようって、仕方がないさ。帰ってお金はもらえなかったというさ」

「がっかりしたな。皆ぼくたちを見てたぜ、^C まあ何だな、出された桃は食べなかつたしさ」

二人は道ばたに腰をおろした。弟は鼻をうごめかせ、いい匂いがする、とつぶやいた。

「木犀もくせいだよ、秋になると今ごろ匂うそうだ」

「おまえ、その木を見たのか」

「見ない」

「さがしてみよう」

通りはすでに明かりを消した家が多く、木犀の匂いは暗い路地の奥から歌うように流れてきた。兄弟は包みを水タンクのかげに隠して立ちあがった。弟が先に歩いた。まずきのう妹をはこんだ病院をさがし、それはすぐにみつかった、そこから家へもどる道すじを逆にたどって、初めてきのう木犀が匂った角で立ちどまった。

「おまえはむこうをさがせ、ぼくはこつちを行ってみるよ、匂いのいちばん強い所が木犀の生えてるとこだ、花をもって帰ろう」
弟はためらった。兄とはなれるのが今夜にかぎって心細かった。飢えた野犬が多く焼け跡をうろついでいて、人を襲うこともきいていたからである。

「兄さんといっしょにその道を行って匂いがうすれたら逆もどりしてもいいんじゃない」

「それもそうだな」

弟は空腹を忘れた。月の光のもとで何かをさがすというのは秘密めいた昂奮こうふんをおぼえるものであり、店での屈辱を忘れることもでき、夜おそく戸外へ出た経験はなかつたから、冒険の一種とも感じられた。

足がひとりでに軽くはずみ、二人はほとんど駆けるように家並みを縫って急いだ。匂いのあるときは鼻をうつつほど強く、ある

ときはその場にたたずんで息をつめなければ感じられないほど稀薄きはくになった。

二人は立ちどまった。匂いがそこで断ちきられたように消えている。弟は荒い呼吸をととのえ、深々と肺の奥まで夜気をすいこんだ。そうするとやはり木犀の匂いは微かすかに漂っているのがわかった。二人はあせつた。

こうなつたからにはどうしても木犀の木を発見しなければならぬ。家々にともつていた最後の灯が消えた。ずいぶん遠くまで来たように感じられる。

「ここはどこだろう」

兄の語尾がふるえていた。あたりの家並みはまったく見おぼえがない。月の光をあびて黒々としずまりかえっている家は、うずくまつた獣のかたちに似ていた。弟は夜の光が露あわにしたこの異様な世界の(ウ) たたずまいに酔つた。

「え？」

「いや、何でもない」

と弟は口ごもつた。目のまえに出現した夜景の珍しさを再び兄に語ろうとしかけて、そのとき D 自分の見ている物を兄もまた必ずしも見ているとは限らない、ととつさに理解したのである。 彼は、え？ と応じた兄の口調に不安といらだちしか感じることができなかった。

(注) 1 ペニシリン——抗生物質。肺炎などに効く画期的な薬とされた。

2 大豆滓——大豆から油をしぼり取つたかす。通常は肥料などにする。

3 メチール——メチルアルコール。毒性が強く、飲む量によっては失明、死亡することがある。

問 1 傍線部(ア)～(ウ)の語句の本文中における意味として最も適当なものを、次の各群の①～⑤のうちから、それぞれ一つずつ選べ。解答番号は 12 ～ 14。

(ア) 心得顔

12

- ① 何かたくらんでいそうな顔つき
- ② 扱いなれているという顔つき
- ③ いかにも善良そうな顔つき
- ④ 事情を分かっているという顔つき
- ⑤ 何となく意味ありげな顔つき

(イ) のつびきならない

13

- ① 予想もつかない
- ② どうにもならない
- ③ 決着のつかない
- ④ 言い逃れのできない
- ⑤ 口出しのできない

(ウ) たたずまい

14

- ① けはい
- ② いごこち
- ③ におい
- ④ しずけさ
- ⑤ ありさま

問 2

傍線部 A「自分ひとり」が乳のみ児のように道理をわきまえない子供だと思われ、それが吐だたくもあつた」とあるが、このときの弟の心情の説明として最も適当なものを、次の ① ～ ⑤ のうちから一つ選べ。解答番号は 15。

- ① 妹のためにお金を得ることだけを考えている兄に比べて、米が売れそうにもない不安から帰ってしまったおうとする自分が幼稚に感じられ、情けなく思っている。
- ② 必ず役目を果たすという強い意志を持って臨んでいる兄に比べて、そんな意欲を持たず放棄したいと考える自分が卑怯ひきょうに思われ、怒りを感じている。
- ③ 桃を食べることが絶望的になり、兄に帰りたいと言ったため、周囲から兄に比べて幼稚だと思われてしまい、そんな事態を招いた自分に腹を立てている。
- ④ ひたすら役目を果たそうとしている兄に比べて、桃の魅力に耐えられずこの場から逃れたいと考える自分が幼く感じられ、いまいましく思っている。
- ⑤ 感情を表に出さない兄に比べて、桃を食べたいという欲求を抑えきれず態度に出してしまう自分が卑しく思われ、嫌悪を感じている。

問 3

傍線部 B 「要するにわたしのいいたいことはだ、社長ともあろう方がこんなけちなペテンをなさるとは残念なんだとあるが、「社長」に対する主人の心情を説明したものととして最も適当なものを、次の ① ～ ⑤ のうちから一つ選べ。解答番号は

16

- ① かつては社長との間も対等で、互いに信頼し合う関係が成り立っていたにもかかわらず、一方的にそれを壊すような行動をとられたことに対し、言いようのない寂しさと悲しみを感じている。
- ② 昔は人を使うほどの地位にあった者が今では平気で人をだますようになってしまったということが、生きていくために手段を選ばなくなった今の自分の生活ぶりに重なり、そのことをつらいと思っている。
- ③ 生きるためには多少の悪事もやむを得ない時代とはいえ、以前は真つ正直な人間で自分を助けてくれたりもしたのだがと、社長の変わりようを嘆き、改心してほしいと願っている。
- ④ かつて自分が雇われていたころとは逆に、今はこちらが何かと世話をしてやっついて感謝されてもいいくらいなのに、恩を忘れ自分をだまそうとする相手に、驚きあきれている。
- ⑤ 見えすいた手段で自分をだまそうとした社長に対して、以前はこんなことをする人ではなかったというやりきれない思いと同時に、それほど自分を低く見ているのかと怒りを感じている。

問 4 傍線部 C「まあ何だ、出された桃は食べなかつたしさ」とあるが、ここからうかがえる兄の心情はどういうものか。その

説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 17。

- ① 米の売買で面目めんぼくをつぶされたので、桃に手を出さなかつたことを持ち出して兄としての立場を回復しようとしている。
- ② お金を得ることができず途方に暮れ、桃を食べなかつたという判断の正しさをせめて弟に確認しようとしている。
- ③ 屈辱感にうちひしがれながらも、桃に手を出さず、毅然きげんとした態度をとれたと思うことで自分を支えようとしている。
- ④ 取引に失敗した今、こんなことなら桃を食べればよかつたと後悔しているが、弟の手前、負け惜しみを言っている。
- ⑤ 取引に不利になると思つて桃に手を出さなかつたのだが、今はそれが酒場の主人への当てつけになつたと考えている。

問 5

傍線部 D「自分の見ている物を兄もまた必ずしも見ているとは限らない、ととつさに理解した」とあるが、本文を通して見いだせる兄と弟の違いを説明したものととして最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 18。

- ① 目の前のものに対して弟は自分の感受性に従い次々と心を動かされていくが、今置かれている状況にどう対応するかということに目が行く兄は、現実には立ち帰ってものを考えようとする。
- ② 深刻な状況でもささいなことに楽しみを見いだす心の自由さを持っている弟に比べ、何かにつけて先回りの心配をしがちな兄は自分の感情に振り回され、思いのままの行動がとれなくなっている。
- ③ どのような状況に置かれていてもただ兄について行きさえすればよい弟は無心なまままでいられるが、年長者としての兄には行動に責任がつきまとい、大人の立場で厳密なものごとを見ようとする。
- ④ 同じ状況で同じものを目の前にしていても、弟は直接目に見えないものにまで意味や象徴性を読み取ろうとするが、兄はあくまでも見えるものそれ自体に即して現実的に思いをめぐらせようとする。
- ⑤ 幼くて世の中での経験も少ない弟が目の前のことを素直に楽しんでいるのに比べ、わずかながらも世間の風にあたりている兄は、その経験にどうしても左右され、今を見失いがちである。

問 6 この文章において「木犀」はどのような役割を果たしているか。その説明として適当でないものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 19。

- ① 木犀は、弟だけでなく、酒場で大人っぽい態度をとっていた兄にも子どもらしい感情を取り戻させ、一時的にはあるが兄弟に解放感をもたらしている。
- ② かすかな匂いを頼りに探す木犀は、当初の目的である葉代のかわりとなるものであり、何かを強く望めばそれが手に入ることもあり得るといふ実感を兄弟に与えている。
- ③ 木犀は、二人に酒場でのつらい体験を忘れさせ傷をいやしてくれる存在だったが、結果的には弟に兄の言動を見直させ、心情的に距離を生じさせる契機となっている。
- ④ 暗やみに香りを漂わす木犀は、兄弟をこれまで見たこともない世界へと誘い、木犀を探すという共通の目標によって、二人につかのまの一体感を抱かせている。
- ⑤ 木犀は、子どもたちの生き生きとした行動を誘発することによって、二人が大人社会の現実と直面する前半とは対照的な世界を作り出す要因となっている。

第3問

次の文章は、荒木田麗女『五葉』の一節で、妻に先立たれた式部卿の宮(親王)が、後の宮に預けた子どもたちのもとを訪れた場面である。これを読んで、後の問い(問1〜6)に答えよ。(配点 50)

やうやうほど近うなり給ひては、さすがに君たちの恋しさもひとかたならずおぼえ給ひ、後の宮まだ里におはしませば、参り給へり。若君はそそき歩き給へるが、はやう見つけ給ひ、上に申さんとて走りおはして、「式部卿の宮、参りたり」と聞こえ給ふを、宮うちほほゑみて見たてまつり給ひ、「こなたに」とのたまはず。親王、御前に参り給ひ、御物語こまやかに聞こえさせ給ふ。姫君は、宮、御ふところはなただ抱きいつくしみ給へるを、父親王はいとかたじけなく見たてまつり給ふ。このごろにのみじうおよすげて笑みがちにうつくしう見え給ひ、親王のさし寄らせ給へば、たかやかに物語し給へる御顔の匂ひなどは、ただ母君のそのままにうつしとり給へるを見給ふには、えたへ給はず、(ア)かきくらされ給ふ。宮も「A」見るに心は」とつゆけうのみおぼえ侍る」とておしのごはせ給ふ。

B 若君、「宮のちご見ん」とて寄りおはしたるに、親王、「これをばらうたくおぼすや」とのたまへば、かしらふりて、「いな。

このちご得給ひてのちは、宮の常に抱き持ち給ひ、まろをばありしやうに抱き給はず」とものしげにのたまへば、親王もうち笑ひ給ひ、「いつまで抱かれ給はんとおぼす。このかみにおはすれば、今からおとなびてこそでもない給はめ。なむつかり」と聞こえ給へば、「あらず。まろは宮の子、ちごはこのごろ養はせ給へるなり。まろが抱かんとすれば、『うち落とし』とてゆるし給はず。いと見苦しきを、率ておはしね。まろあれば、ここにはやくなし」とのたまふを、後の宮、いとつつくしう見たてまつらせ給ひ、うち笑ませ給ひて、「常にもかやうに心せばくのみ聞こえ給ひて」とのたまはず。

親王は引き寄せたてまつり給ひ、「童けてらうがはしくそそき給はで、おとなしうし給ひ、宮の御心安からんさまに見えたてまつり給へ」と聞こえ知らせたてまつり給へど、いとかひなげに何ともおぼしたらぬを、心苦しう見たてまつり給ひ、「おとなび給へらんほどをも、え見たてまつらぬなめり」とのたまひて、いみじううちしをれ給へるを、宮、「などかくはおぼしつる」とゆゆしげにのたまへば、「あやしうもの思はしうのみ侍りて、世に久しからんものともおぼえ侍らで」とまぎらはし給ふに、「いと

忌々しう。さまでなおぼしそ。世にたぐひなきことにしもあらず。いみじう思ひて、(イ) 同じ道にと契りつる人も、しばしこそあれ、ほど経れば忘れ草生ほすなん、世の常のことなる。さりとして浅きにもあらず。かへりてめやすきかたにこそはあらめ。ひたぶるにおぼしむすばほれて、(ウ) 埋もれいたくものし給はん、いといふかひなくめめしうこそあれ。上の『御世も末になりたり』このたまはするを、『さしつぎには』とおもむけさせ給ふに、あいなう御心みだり給はんことは、いとかたじけなきことにぞあめる。(注) 『住吉の岸』をだに尋ね給へ。さらば、誰がためにもめやすからん」と聞こえさせ給へば、親王、

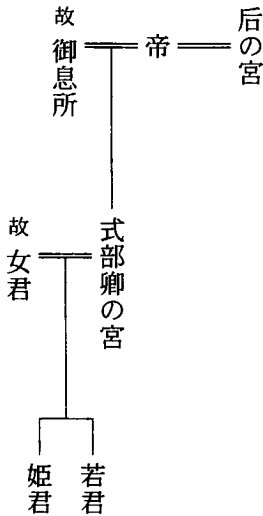
つみぬべき忘れ草さへうき身には人をしのぶの色に見えなん

とのたまふを、心苦しう見たてまつらせ給ひて、宮、

C 尋ねてもなごつまざらんなべて世のうきを忘るる草葉ばかりは

とおぼしあつかひつるもいとかたじけなく、「D 心の中を見せたてまつりたらましかば、いかさまにかおぼしめすらん」とおぼゆるも、たへがたうおぼすを、つれなくしのびてまかで給へり。やがてその夜忍びて出で給ふ。御供にも心安きかぎり二、三人ばかりにて三井寺におはしまし、日ごろむつまじうおぼしめしつる阿闍梨の坊にて、御髪下ろし給へり。

(注) 住吉の岸——和歌などでは忘れ草に結びつく土地とされる。 [人物関係図]



※ 大学入試センターより訂正がありました。

問 1 傍線部(ア)～(ウ)の語句の解釈として最も適当なものを、次の各群の①～⑤のうちから、それぞれ一つずつ選べ。解答番

号は

20

～

22

(ア) かきくらしされ給ふ

20

- ① むなしく時を過ごしていらつしやる
 ② 悲しみにくれていらつしやる
 ③ 感涙にむせんでいらつしやる
 ④ 部屋にこもりきりでいらつしやる
 ⑤ 心に描き続けていらつしやる

(イ) 同じ道にと契りつる人

21

- ① 一緒に歩いていこうと誓い合った人
 ② ともに仏道修行をしようとして約束した人
 ③ 旅に出る時は一緒に約束した人
 ④ ともに芸を磨こうと誓い合った人
 ⑤ 死んでからも一緒にだと誓い合った人

(ウ) 埋もれいたくものし給はん

22

- ① ひどくふさぎこんでいらつしやるのは
 ② 苦痛を見せずに我慢していらつしやるのは
 ③ ひたすら人目をはばかっていらつしやるのは
 ④ 内気すぎて人前に出られずにいらつしやるのは
 ⑤ 才能を発揮できずに苦しんでいらつしやるのは

⑥	⑤	④	③	②	①		
若君	後の宮	若君	後の宮	若君	後の宮	聞こえ	a
後の宮	若君	後の宮	若君	後の宮	若君	給ふ	
姫君	若君	若君	姫君	姫君	若君	聞こえ	b
式部卿の宮	式部卿の宮	式部卿の宮	後の宮	後の宮	後の宮	給へ	

問2 波線部 a・b の敬語について、それぞれの敬意の対象の組合せとして正しいものはどれか。次の ① ～ ⑥ のうちから一つ選べ。解答番号は 23。

問3 傍線部A『見るに心は』は、ある和歌を踏まえた表現である。その和歌はどれだと考えられるか。次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 24。

- ① 女郎花^{をみなへし}見るに心は慰までいとどむかしの秋ぞ恋しき
- ② 女郎花見るに心は慰まで都のつまをなほしのぶかな
- ③ よそにても見るに心は慰まで立ちこそまされ賀茂の川波
- ④ しのぶ草見るに心は慰まで忘れがたみに漏る涙かな
- ⑤ かたみぞと見るに心は慰まで乱れぞまさる妹^{いも}が黒髪

問4 傍線部B「若君、「宮のちご見ん」とて寄りおはしたるに」以下に続く、「若君」の「宮のちご」に対する言動の説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 25。

- ① 式部卿の宮の後継ぎである自分の立場がゆらぐのを恐れ、妹はいなくてもかまわなと言っている。
- ② 妹のことがかわいくてたまらないが、自分は別格であるという自覚から、本心とは逆の態度をとっている。
- ③ 妹をうまく抱けなくてけがをさせそうになったことがあるのに、反省する態度を表現していない。
- ④ 後の宮の愛情を独占できない不満から反発の言葉を口にするが、本当は妹に対して強い関心を抱いている。
- ⑤ 後の宮に思う存分甘えられないことに不満を感じているが、兄としての立場をわきまえて我慢している。

問5 傍線部C「尋ねてもなごつまぎらんなべて世のうきを忘るる草葉ばかりは」の和歌に后の宮はどのような思いをこめている

のか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 26。

- ① 女君を失ったことは、式部卿の宮のみならず自分にとつても大きな悲しみであるので、一緒に忘れるための努力をしようと呼びかけている。
- ② 夫である帝が式部卿の宮を次の帝にと考えているので、早く女君のことを忘れて広く世間に目を向け、為政者としての徳を養うように促している。
- ③ 式部卿の宮が女君のことを忘れかねて世をはかなんでいるのに対し、女君を失った悲しみを忘れて前向きに生きるのがよいと勧めている。
- ④ 式部卿の宮が女君を忘れようと努めているのに理解を示しながらも、最愛の妻だったのだから存在そのものを忘れてしまわないでほしいと願っている。
- ⑤ 式部卿の宮が女君をいつまでも恋い慕っているのを恥じて、人目を忍びがちであるのに対し、妻を忘れないでいるのは恥ではないと論じている。

問 6

傍線部 D「心の中を見せたてまつりたらしましかば、いかさまにかおぼしめすらん」とあるが、式部卿の宮は、なぜ自分の心の中を後の宮に言えないでいるのか。その理由として最も適当なものを、次の ① ～ ⑤ のうちから一つ選べ。解答番号は

27

- ① 新しく妻を迎えることを勧めしてくれる後の宮の心遣いをありがたく思いつつも、亡き妻が残した子どもたちのことを考えると応ずるわけにはいかず、かといって断つて後の宮を落胆させたくないと思つたから。
- ② 出家の決心を固めているものの、成長していく子どもたちの無邪気な様子に心が残り、また、かいがいしく世話をしてくれる後の宮に出家の本心を知らせて悲しませるのはつらいと思つたから。
- ③ 健やかに成長していく子どもたちと久しぶりに会い、自分の手元に引き取つて育てたいと思つたが、そうすれば子どもたちをかわいがつてくれる後の宮がきつと寂しがるに違いないと思つたから。
- ④ 出家の決心を伝えるために後の宮のもとを訪れたが、子どもたちが幼いうちに新しく妻を迎えた方がよいと後の宮から先に言われて、出家の意志を伝えるのはやめた方がよいと思つたから。
- ⑤ 帝の強い希望と後の宮の勧めにもかかわらず帝位につくことを拒否しようと決心しているものの、後の宮の期待が思いのほか大きいことを知って、断ることはできないと思つたから。

第4問 次の文章を読んで、後の問い(問1〜6)に答えよ。(設問の都合で返り点・送り仮名を省いたところがある。)

(配点 50)

有^リ客携^ヘ柴^(注1)窠^ス片磁^ヲ索^ニ数^百金^ヲ云^フ「嵌^ニ於^カ胃^ニ臨^レ陣^ニ可^シ以^テ辟^ニ火^(注2)

器^ヲ然^{レトモ}無^由知^確否[。]余^曰「何^下不^下繩^懸此^物以^テ銃^発鉛^丸擊^之之[。]

如^シ果^タ辟^レ火^必不^レ碎[。]価^数百^金不^レ為^レ多[。]如^シ碎^則辟^レ火^之説^不

確^理不^レ能^ハ索^ニ価^数百^金也[。]鬻^者不^レ肯^曰「公^於賞^鑑非^ニ当^行

殊^殺風^景急^懷之^去後^聞鬻^於貴^家竟^得中^百金^上。

夫^君子^可欺^以其^方難^罔以^非其^道砲^火横^衝如^ニ雷^霆

下^擊豈^区区^片瓦^所能^禦且^雨過^天青^不過^二釉^色精^妙耳[。]

究^由人^造非^出神^功何^断裂^之余^尚有^二靈^如是^耶余^作旧

瓦^硯歌^有云[。]

(注9)
銅雀台址類無遺

何乃剩瓦多如斯

文士例有_ニ好_レ奇癖_一

心知_ニ其_ノ妄_一姑_ニ自_一

柴片亦此類而已矣。

(紀昀「閱微草堂筆記」による)

(注) 1 柴窯——磁器の名品を産んだ古い窯の名。

2 辟——避ける。免れる。

3 当行——専門家。くろうと。

4 其方——理にかなった方法。

5 罔——あざむく。

6 雷霆——かみなり。

7 雨過天青——柴窯の磁器の色調を形容することば。

8 釉色——陶磁器のうわぐすりの色。

9 銅雀台——魏の曹操が築いた展望台。この建物の瓦を用いて作った硯がもてはやされた。

問 1 傍線部(ア)「出」・(イ)「余」と同じ意味の「出」「余」を含む熟語として最も適当なものを、次の各群の①～⑤のうちから、それぞれ一つずつ選べ。解答番号は

28
・
29

(ア)

28 出

- | | | | | |
|---|---|---|---|---|
| ⑤ | ④ | ③ | ② | ① |
| 出 | 出 | 出 | 出 | 出 |
| 資 | 奔 | 師 | 藍 | 帆 |

(イ)

29 余

- | | | | | |
|---|---|---|---|---|
| ⑤ | ④ | ③ | ② | ① |
| 余 | 余 | 余 | 余 | 余 |
| 暇 | 熱 | 人 | 念 | 裕 |

問2 傍線部 A「無由知確否」・ D「難罔以非其道」の返り点の付け方と書き下し文の組合せとして最も適当なものを、

次の各群の ① ～ ⑤ のうちから、それぞれ一つずつ選べ。 解答番号は 30 ・ 31 。

A 無由知確否

30

① 無_レ由知確否 由_レ無_クして確たるを知るや否やと

② 無_レ由知_二確否_一 確たるや否やを知るに由無しと

③ 無_レ由_レ知確否 知るに由無きは確たるや否やと

④ 無_レ由_二知_レ確否_一 確たるを知るや否やに由無しと

⑤ 無_レ由知_二確否_一 由無くして確たるや否やを知らんと

D 難罔以非其道

31

① 難_レ罔_レ以_レ非_二其道_一 罔_レ難きは其の道に非ざるを以てなり

② 難_レ罔_レ以_レ非_二其道_一 罔ふるを難ずるに其の道に非ざるを以てす

③ 難_二罔_レ以_レ非_二其道_一 罔ふるに其の道に非ざるを以てし難し

④ 難_二罔_レ以_レ非_二其道_一 罔ふるに其の道に非ざるを以てするを難ず

⑤ 難_レ罔_レ以_レ非_二其道_一 罔ふるを難じて以て其の道を非とす

問 3 傍線部 B「何不下縄懸ニ此物、以テ銃発ニ鉛丸ニ撃キ之」の解釈として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選

べ。解答番号は 32。

- ① どうして胃を縄でつるし、銃弾で撃たないことがあるのか。
- ② どうして胃を縄でつるし、銃弾で撃たないのか。
- ③ どうして磁器の破片を縄でつるし、銃弾で撃たないのか。
- ④ どうして胃を縄でつるさずに、銃弾で撃つことができようか。
- ⑤ どうして磁器の破片を縄でつるさずに、銃弾で撃つことができようか。

問 4 傍線部 C「急懐之去」とあるが、なぜ「鬻者」はそうしたのか。その理由として最も適当なものを、次の①～⑤のうち

ちから一つ選べ。解答番号は 33。

- ① 骨董こつどうを見る目がない人物に売ろうとしたことを後悔したから。
- ② 買う気もないのに言いがかりをつけられたと腹を立てたから。
- ③ 風雅を理解しない人物に売ろうとしてもむだだとあきらめたから。
- ④ 百金よりも安く買いたたかれるのではないかと心配したから。
- ⑤ 高く売りつけるための嘘うそが通用する相手ではないと悟ったから。

問 5 傍線部 E について、(i) 空欄に入る語、(ii) その解釈として最も適当なものを、次の各群の ① ～ ⑤ のうちから、それぞれ

一つずつ選べ。解答番号は

34

35

(i)

34

- ⑤ 虚 ④ 欺 ③ 詐 ② 娛 ① 愉

(ii)

35

- ⑤ ④ ③ ② ①
- とりあえず自分の心をごまかすのである。
 そのうちに自然と愛着がわいてくるのである。
 やがて自分も他人をだますのである。
 時とともに自然と執着心がなくなるのである。
 ともかく自分の趣味を楽しむのである。

問 6 筆者の考えにもとづき、学術・文化について意見を述べるとすれば、どのようなものになるか。最も適当なものを、次の

① ～ ⑤ のうちから一つ選べ。解答番号は 36。

- ① 古典を研究する人の中には、古いものの価値をただ古さの中でのみ求める向きもあるが、古いものの中から新しい価値を発見してこそ研究の意義がある。
- ② 伝統の継承に力をそそぐことが、文化政策にたずさわる者の重要な役目であり、貴重な文物を広く収集して長く保存することに費用を惜しむべきではない。
- ③ 新しい文化の創造には柔軟な発想が必要不可欠であり、好奇心と探求心に富む若者に十分な研究の機会が与えられるように、環境を整備することが重要である。
- ④ 学術の進歩は人間の生活の向上に寄与すべきものであるから、学者は自分の興味を満足させるために研究するのではなく、常に実用性を念頭に置く必要がある。
- ⑤ 古い文物や書物を研究するには、事実にもとづいた検証と合理的な判断を重んじる態度が必要であり、権威に追従したり流行に左右されたりしてはならない。